

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720213

研究課題名（和文）

メタ認知方略の習得課程の解明と学習者支援モデルの構築

研究課題名（英文）

Clarifying the Process of Metacognitive Strategy Learning and
Establishing Learner Support Model

研究代表者 池田 真生子 (IKEDA MAIKO)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00425323

研究成果の概要（和文）：本研究では、外国語学習者がメタ認知方略の指導を受けた後の学習行動を、比較的長期間に渡り質的に観察することにより、(1) 学習者がメタ認知方略を習得していくには強い動機およびさらなる後押しが必要であることを示した。さらに、(2) メタ認知方略の習得を妨げている要因には、指導内容が学習習慣として定着するまでの間の強制力の不足、学習習慣への取り入れる際に感じるコスト（煩雑さ）、そして指導内容に関する理解不足であることを指摘した。続いてメタ認知方略指導において学習者同士のグループ活動を盛り込み、メタ認知方略の使用が促進されるかを量的および質的に検証し、(3) 授業内外の学習行動を有機的に結び付けるようなグループ活動が、メタ認知方略の使用、ひいては学習習慣（自己調整）の形成に有用であることを明らかにした。こうした研究の関連で、(4) 質的研究手法の具体的方法や有効性についてもまとめた。

研究成果の概要（英文）：This study qualitatively clarified the process of learners' becoming autonomous by obtaining metacognitive strategies and knowledge. It was found that, together with a strategy intervention, learners needed additional encouragement by peer or other teachers as well as strong motivation or interest in learning the metacognitive strategies and knowledge. Furthermore, lack of strong encouragement until habit formation, cost of incorporating the strategies taught, and their misunderstanding of the intervention was identified as possible obstacles against learners' use of metacognitive strategies taught. Based on these findings, effectiveness of group activities in the strategy intervention was also investigated. The results found that an in-class group work which is well linked with individual study outside of the class facilitates learners' use of metacognitive strategies and knowledge and therefore self-regulated learning. Finally, this study also summarized the methodology for qualitative research with details of data collection, analysis, and presentation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：英語教育学・外国語教育学・応用言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：自己調整学習、外国語学習方略、メタ認知、学習者支援

1. 研究開始当初の背景

日本のような環境において外国語能力を向上させるためには、教室のみではなく教室外での学習が大切であり、その教室外での学習を効率的に進めていくためには、学習者がメタ認知方略を駆使して自らの学習をコントロールし、自律的に学習を継続していくという自己調整学習が重要であるといわれてきた (O'Malley & Chamot, 1990; 竹内, 2008; Wenden, 1998; Zimmerman, 2001 など)。しかしながら、メタ認知方略指導の短期的な有効性はある程度認められているものの (Wenden, 1987; Dörnyei et al., 2006; Rubin, 200; 竹内, 2008)、指導終了後に学習者がどのようにメタ認知方略の使用を習慣化 (自己調整化) していくのか、そしてどのようなことが習慣化 (自己調整化) を妨げるのかについては、ほとんど解明されていなかった。また、現在までにおこなわれている実証研究においても、そのほとんどが量的な研究で (Vandergrift, 2005; Dreyer & Nel, 2003 など)、質的に長期間に渡って習慣化 (自己調整化) の過程を究明しようとした研究は、非常に少なく、わずかに 植木 (2007) が7ヶ月後の指導効果定着の具合を検証しているのみであった。

一方、学習者支援モデルの構築についても、教室内部の方略指導についての研究として Chamot (2004), Cohen & Weaver (2005), Gu (2007) などの研究や、申請者によるこれまでの研究 (Ikeda, 2007; Ikeda & Takeuchi, 2005)、さらには Ozeki (2000) らによる研究は存在しているものの、いずれも教室内部の指導が中心で、教室外での支援にまで踏み込んだモデルの構築は、なされていなかった。

そこで、本研究では、メタ認知方略の指導を受けた後の学習者たちの (教室内外での) 学習活動に着目し、メタ認知方略の使用状況を質的に比較的長期間に渡って観察することで、メタ認知方略の習得過程を解明することを目指した。さらに、そこから明らかとなったことをもとに、学習者支援モデルの構築を目指した。

2. 研究の目的

上記のような流れを踏まえた上で、本研究の目的を、授業内においてメタ認知方略の指導をおこなった後、教室外でのメタ認知方略の使用状況の変化を質的に観察し、(1) どのような過程でその使用が定着するのか、そしてまた、(2) どのような要因が定着を阻害するのか、を探ることに置いた。さらに、(3) 教室内部でのどのような活動が、メタ認知方略使用の習慣化 (自己調整化) を促進するのかを

探ることとした。

3. 研究の方法

上記(1)および(2)の研究目的においては、9週間に渡るメタ認知方略指導をおこない、その期間中に学習者が記録した授業外学習に関する日記 (学習日記; Study Journal) をデータとして質的に分析した。また、学習日記の内容に関して確認をしたり、さらに詳しいデータを得たりするために、学習日記を提示しながら、いわゆる刺激提示による回顧法 (Stimulated Recall: Gass & MacKey, 2000) と呼ばれる方法をもちいてのインタビューや、メタ認知指導終了より6ヶ月経過してからのインタビュー (Retrospective Interview) などをおこない。データの補強をおこなった (図1参照)。

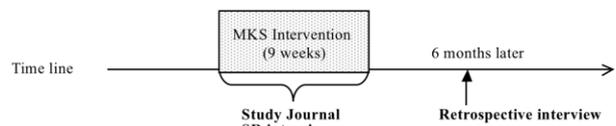


Figure 1. Data collection.

研究目的(3)については、メタ認知方略指導の後に、実験群および統制群それぞれに対して異なる種類の学習活動 (複数) を実施し、授業外での学習活動におけるメタ認知方略の使用の変化を調査紙およびアンケートにて収集し、量的データ分析と質的データ分析を統合させる手法 (Mixed Methodology: Dörnyei, 2007) にて分析した。

4. 研究成果

本研究では、まず(1)指導を受けたメタ認知方略の使用が定着・習慣化 (自己調整化) されるには、自分の英語学習を何とかしたいという強い動機があり、さらに指導されたメタ方略について他の学習者と具体的な使い方や有用性について話したり、同時期の他の授業や過去の授業などで同様のことを教えられたり (使用を勧められたり) するなど、メタ認知方略指導の後にさらに後押しするようなものがあってはじめて、指導内容が定着するという仮説を形成した (図2参照)。

さらに、(2)メタ認知方略の使用定着を阻害する主な要因として、(a)学習習慣が形成されるまでの強制力の不足、(b)新しく学んだ方略を自分の学習習慣へ取り入れる際に感じるコスト (煩雑さ)、そして(c)指導内容に

関する理解不足、の3つが存在することを明らかにした。



図2. メタ認知方略の習得過程

その後、学習者支援のモデルを構築すべく、(1)で得られた仮説のうち、他の学習者との話し合いをグループ活動という形でメタ認知方略指導の後に導入し、どのようなグループ活動が効果的であるかを検討したところ、実験群・統制群いずれのグループにおいてもメタ認知方略の使用頻度（量的）には変化が見られず、グループ活動の効果が確認されなかった（図3、4参照）。

しかしながら、アンケート結果の質的な分析から、(3)授業内で完結してしまうようなグループ活動ではなく、授業外での学習と有機的に結びつくようなグループ活動の方が、メタ認知方略の使用、ひいては学習習慣（自己調整）の形成の一助となっていることを明らかにした。また、それ以外にも、(a)活動内容がより具体的な活動、(b)活動時間がある程度確保されている活動、そして(c)学習者同士の意見交換に留まらず、教師によるクラス全体での統括（まとめ）もおこなわれるような活動などが、学習者の支援につながるグループ活動である可能性が高いことも示した。

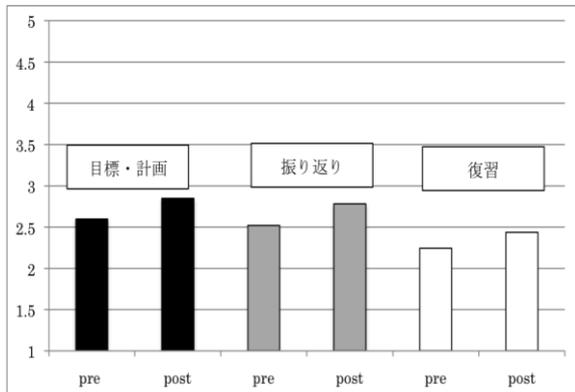


図3. メタ認知方略の使用頻度（実験群）

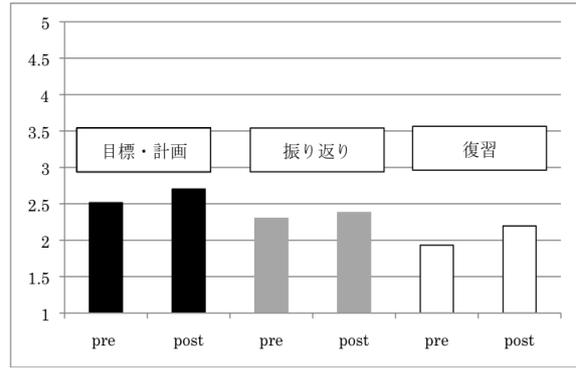


図4. メタ認知方略の使用頻度（統制群）

あわせて、これら一連の研究を通して中心的に実施された質的研究手法について、最新のデータ収集・分析・提示方法をよりもさらに具体的な例とともにまとめた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

池田真生子 読解方略とメタ認知 門田修平、野呂忠司、氏木道人（編著）『英語リーディング指導ハンドブック』査読無、2010、273-276

池田真生子 質的研究 門田修平、野呂忠司、氏木道人（編著）『英語リーディング指導ハンドブック』査読無、2010、361-373

Ikeda, M. Cooperative Learning for “Other”-regulated Learning. Proceedings of the Japan Association of College English Teachers (JACET) 50th Commemorative International Convention. 査読無、2011、(掲載確定)

〔学会発表〕（計2件）

Ikeda, M. What are possible obstacles against learners’ incorporation of newly-learned metacognitive knowledge and strategies? The Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics. 2010年3月6日 Sheraton, Atlanta, US.

Ikeda, M. Cooperative learning for “other”-regulated learning. 大学英語教育学会（JACET）創立50周年記念国際研究大会 2011年8月31日 西南学院大学（採択済）

み、予定)

[その他]
ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田真生子 (IKEDA MAIKO)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00425323

(2) 研究分担者

該当なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当なし ()

研究者番号：